

# 朴散華

能村 研三

## 歩行速度

同じ道を同じ距離だけ歩いても、その速さはさまざまだが、駅へ向かう朝、周りを見渡すと、前だけを見て迷いなく進む人、スマホを見ながら流れに合わせて歩く人、景色を楽しみながら一歩一歩を味わう人とは様々である。

歩行速度は、医学やリハビリの世界では「全身状態を映す鏡」とも言われていると聞いたことがある。筋力やバランス感覚、体の協調性などが一つにまとまって表に出たものが歩く速さであり、とくに高齢になると健康状態を測る大切なパラメータとも言われている。

けれど、通勤路で隣を歩く人々の速さを見ると、数字にはならない生活のリズムや生き方のテンポも、一緒ににじみ出ているように感じられる。

私も少し前まで歩くのは速い方であつたが、最近は一生涯懸命に歩いていても、人にどんどん追い越される

ことが多くなってきた。相手が若い人であれば仕方がないが、同じ年代の人に追い越された時のショックは隠せない。

### 春の暮老人と逢ふそれが父

平成元年の春の句。登四郎は七十八歳を迎えていたので、二年後には私もその歳を迎えることになる。

この句の自註には「父はいつも健脚を自慢していたが、私が仕事から帰る途中、向うからゆっくり歩いて来る老人がいた。近づいてみるとそれが父だった」と書いていて、この時が父の老いというものはつきり意識した瞬間であつた。

まさに、あの時の父に年齢が近づいているのだから仕方ないことと思うが、いつまでも杖を突かないで歩くためにも、月に二度、パーソナルジムに通って筋肉トレーニングを行っている。まだまだ成果は現れないが、しばらくは頑張ってみたいと思っている。

浮いてこい浮く素直さは怖きこと

白といふ色あたらしき更衣

ネクタイを外す自由や更衣

抜きん出る新樹の気負ひ男子校

多機能の使はぬ機能閑古鳥

見つかからぬ鍵や天道虫だまし

音の無き弓射る鬨志青葉雨

筍の向き見極めて入る一打

群れ咲くも孤高の白さ朴匂ふ

神近き枝を離れて朴散華

能村 研三